

日本語の表記方法の歴史

現在人の我々は日本語を表記するときには、漢字・平仮名ひらがな混淆文です。」

ご存知のようにこの漢字は中国からの輸入文字でありますし、平仮名も漢字を日本独自にくずした字です。漢字のくずし字（草書体）が平仮名です。

それでは私たち祖先はこの輸入文字の漢字をどのように日本語に当てはめて来たかの歴史を見てみたいと思います。

もう昔の日本語や漢文は現在なじみがなく、高校以上の教科書しかお目にかかることはないのですが、ただ博物館や郷土資料館などに出かけた時には古文書や古い日記、物語が展示されています。

なかなか読むのに苦労します。ここでは読み方について詳しく講釈するつもりはありません。

昔の漢字の入った日本語の仕組み、構造をお話することで、いくらか昔の日本語に親しみを感じて頂ければと思います。

まず漢文（漢語）の構造です。

例文、「我 与 彼 書」

日本語に訳しますと、「我（私）は彼に書を与える」となります。

ここで漢文と日本語の構造（文法）の違いをご注目ください。

日本語は主語―補語―目的語―述語です。一方漢文は主語―述語―補語―目的語です。

そうです漢文は英語と同じ構造なのです。

漢文は日本語と違い、述語と目的語が逆転します。そして言葉と言葉を結ぶ膠着語の助詞（て・に・を・は）がありません。

漢文は述語と目的語の位置は英語と同じですが、違うところがあります。漢文には基本的に単数と複数の表現、現在と過去の違いを表しません。又人称代名詞（我、彼など）を略して表記しない場合がありますので、文を読みながら探っていくこととなります。英語はここは厳格ですね。日本語もあいまいなところはいくらかありますが、現在文は厳格になってきました。しかし英語の現

在完了形、過去完了形などは日本語でも言い表すのは難しいですね。

これが漢文の構造のすべてではありませんが漢文の基本形とお考えください。

さて古代古く日本語には文字がありませんでした。伝承文化でした。しかし文字は他人に自分の意思を伝える手段として又記録の上で便利です。

漢字がいつ日本に入ってきて使用するようになったかは明確ではありません。5世紀に入ってから渡来人に教わったのでしょうか。埼玉県稲荷山古墳から発掘された鉄剣の銘文に漢字が使用されています。(日本語を表すのに漢字の音を借りて表示＝表音文字)

そしてこの表音文字とは別に、漢字の意味から訓を付ける方法を見つけました。表意文字です。

万葉集ではこの表音文字(音仮名)を主体として、表意文字(訓仮名)が併用されています。

例文、「春野余 霞多奈毗伎 宇良悲」

はるののにかすみたなびき うらかなし
許能暮影余 鶯奈久母 大伴家持

「春」とか「野」とか「鶯」は、漢字の意味と日本語の意味を合致させ、漢字を「はる」、「の」、「うぐいす」と日本語読みにしました。表意文字で、訓仮名(訓読み)と言っています。

「多奈毗伎」や「奈久母」は漢字の音をそのまま持ってきたのです。漢字に意味はありません。

本来この両方の読み方を万葉仮名と言いますが、普通万葉仮名と言えば表音文字だけを指すことが多いですね。

この表音文字の万葉仮名は平安時代に現在の平仮名のもとへと変化していきます。要するに漢字をくずすのです。(草書)

「多」は「太」の字を使い、くずして「た」です。「多」のくずし字を使うこともあります。「奈」はこれをくずして「な」です。「毗」は「比」の字を使い、これをくずして「ひ」です。「伎」は「幾」の字を使い、これをくずして「き」です。「支」や「喜」をくずすこともあります)

そしてこの平仮名は平安時代以降、女の人を中心に、日本語通りの文法(主語―目的語―述語、てにをはの助詞)で使われていきます。

男性も女性あての手紙などでは使用します。

そして女の人が著わす物語、日記の文学の中で使用されます。現在、古文と称しています。

例示、すがわらのたかすえ管原孝標の娘の日記、さらしな更級日記の書き出し

「あづま路の道の果てよりも なほ奥つかたに生ひ出でたる人 いか
ばかりかはあやしかりけむを・・・・・・・・・・」

このように平仮名主体で漢字が混じります。

もちろん、漢文体そのものも中国から入ってきて使用されます。一に仏教のお経で、次いで漢学、儒学でそして官庁で使用されていきます。

この漢文体は前述のように文法は主語―述語―補語―目的語です。

例示①イ、「我 与 彼 書」

例示②イ、「歳 月 不 待 人」

これは日本語ではありません。漢文です。これを日本語で読めるように考えた人々がいました。それは当時の僧侶です。

この漢文に返り点(訓点)を付して日本語に読み換えたのです。訓読すると言っています。

例示①ロ、「我 与 二 彼 書 一」

例示②ロ、「歳 月 不 待 人」

このようにレ点、一・二、(三、四もある)付けて日本語で読んでいきます。この外に上・中・下が入る場合もあります。

右記の二つの返り点付きの例示は日本語に言い換えやすいですね。次のように日本語で読みかえることができます。

例示①ハ、「我は彼に書を与える」

例示②ハ、「歳月は人を待たず」

このように日本語にしまった文を読み下し文(書き下し文)と言っています。

更に僧侶はお経を読むために、漢文に送り仮名やルビを振りしました。

例示①ニ、「我 与 二 彼 書 一」(ワレがルビで、ハは送り仮名、)

例示②二、「歳月 不^ズ 待^{マタ} 人^{ヒトヲ}」(サイゲツがルビでハは送り仮名)

このようにルビ、送り仮名と返り点を付しました。

ここで注目ください。ルビや送り仮名はカタカナ表記です。僧侶が漢字からカタカナを作り出したのです。

送り仮名も付す方法は後世あまり一般化しませんでした。カタカナは今日まで使用されています。

明治から戦前まで公式文章は漢字とカタカナで表記されました。言うまでもなく戦後は漢字と平仮名と外国語をカタカナで表記します。

例示イを白文、例示ロを返り点付き、ハを読み下し文、二をルビ・送り仮名付きと言っています。

又更に読み下し文は難解な場合が多いので、現代語訳の文にする場合もあります。

しかし我が祖先はこの漢文を日本風に変えていきます。

純粹の漢文体の使用は、平安時代以降お経、儒学にはほぼ限定されていきます。

日常的に使われる漢文は、文の終わりに候^{そうろう} (ですー丁寧語)、也^{なり} (である)、

可^{べし} (…すべし) 奉^{たてまつる} (尊敬語)、了^{おわんぬ} (おわんぬー過去形)、被^{ひれる} (尊敬語) な

どの文字を入れて、丁寧語、尊敬語、過去形を作り出しました。更に日本語の

副詞句を創設して文中に入れました。(宣^{よろしく}・寧^{むしろ}・抑^{そもそも}・悉^{ことごとく}・剩^{あまつさえ}・次^{ついで}・

具^{たぐひ}等々) これを和様漢文と言っています。

それでも平安時代から室町時代の中期までは、和様漢文も文法的には漢文調の色彩が強いのですが、漢文からもって来て、漢音読みする漢字(音読み)。と訓読みする漢字が混在していきます。それに日本独自の言い回しが入ってきます。

例示、「今日、於^{むつのくに}陸奥国^{やすひら}、泰衡襲^二源豫州^一、是^{これかつうはまかせ}且^二任^{ちよくじよう}勅^一詔^{かつうは}、且^一

依^{にほんおおせ}二品^{なり}仰^一也^一」

(*「吾妻鏡」の第九の一節から)

読み下しとカッコ内で注を付けます。

「今日、陸奥の国において、泰衡やすひら（藤原）が源豫州（義経）を襲う、これかつうは（ひとつは）勅諭に任せ（天皇の指令により）かつうは（もう一つは）二品（源頼朝）の仰せによってなり」
且（かつう）と言う言い方も和洋漢文の独特の言葉です。

* 「吾妻鏡」は鎌倉幕府によって著された幕府の記録書です

この和洋漢文は公式の文書（手紙・指令書）には江戸時代末期まで使用され
ます。

ただ、戦国時代から江戸時代にかけて、私信や物語の文章を表す場合は、
同一文章の中で文節によって漢文の文法（語順）になったり日本語の文法（語
順）になったりします。

又、助詞に仮名（ひらがな・カタカナ）が適当に挿入されます。これを和漢
混淆文と言っています。

そして明治に入って、公文書は和様漢文を止め、漢字とカタカナの混淆の日
本語で書き表されます（日本語の文法）。文章の表現は和様漢文の読み下し文の
ようであり、これを文語体と称します。

明治時代の小説も最初は文語体でしたが、夏目漱石が初めて口語体での小説
を著わしました。「坊ちゃん」など。

現在の我々が使う日本語です。言文一致の文です。日本語の文法（主語―目
的語―述語、助詞付き）で漢字（音、訓）と仮名の混じり合いです。

以上

2018年3月27日

梅 一声